

幼児の創造性とクロスカテゴリーを用いた想像画の検討

船木飛鳥(指導：野田満教授)

キーワード：創造性、描画、クロスカテゴリー

問題・目的

江尻(1993)は幼児・小3・小5の子どもを対象とし「この世に存在しない X(人間・家)を描く」という研究を行った。しかし幼児としては保育園年長児(m; 5:8, r; 5:2~6:2)がまともな対象とされており、5歳前後の幼児との比較や想像画の発達については述べられておらず、またクロスカテゴリー(別の概念カテゴリーを組み合わせること)の有無に対する教示の効果についても、年齢間での比較はされていたが幼児の結果のみの教示の効果については述べられていなかった。よって今回は4~6歳の幼児を対象とし、クロスカテゴリーの生起についてその発達の变化と教示による効果を検討した。

方法

埼玉県社会福祉法人愛抱会かしの木保育園、埼玉県社会福祉法人ゆたか会ゆたか保育園の園児計48名(男児23名、女児24名、4歳児14名、5歳児21名、6歳児12名)を対象とし、描画の基礎能力テストのあと、クロスカテゴリー(以下、CC)課題として存在しない人間・家を描かせた。その際きっかけとして○△□の図形(縦横4.5cm)を用意し、また教示についても、見本の絵を説明しながらヒントを与える見本群、言葉のみでヒントを与える言葉群、ヒントを与えない統制群を用意した。

結果

CC課題で得られた描画を図1、図2に示した。

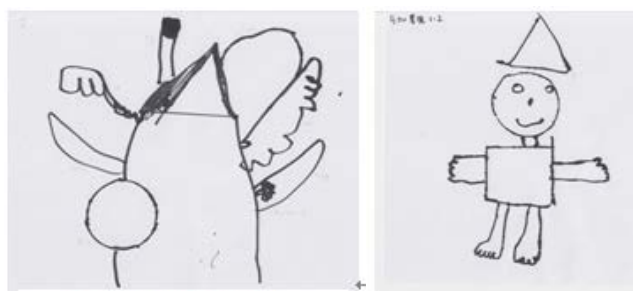


図1 CC課題の描画(家)

図2 CC課題の描画(人間)

CC課題で得られた絵は、どのような変更が行われていたかによってレベル0~レベル3まで分類した。図1は、お家に左からボール(○)、つまようじ、手、煙突、風船、羽、棒、棒の上に小さい手が描かれており、大幅なCCがみられたためレベル3とした。図2は普通の人間(○が顔、□が身体)と電気(△)が描かれたためレベル1とした。レベル0はCC課題が完成していないもの、レベル2は部分的な変更のみ行われているものであった。

年齢と基礎能力テスト通過(図3)について χ^2 検定を行った結果、年齢間に有意な差がみられた($\chi^2(2)=10.645, p<.01$)。また、年齢とCC有無(図4)について χ^2 検定を行った結果、年齢間に有意な差がみられなかったが、その傾向がみられた($\chi^2(2)=5.677, p<.10$)。

教示3群についての分析では、CCの有無について χ^2 検定を行ったところ、教示3群間に有意な差はみられず($\chi^2(2)=3.518, n.s.$)、CC段階についての χ^2 検定でも教示3群間に有意な差はみられなかった($\chi^2(6)=10.154, n.s.$)。

性別についての分析では、基礎能力テスト通過、CC有無、CC段階について χ^2 検定を行ったが、どれも有意な差はみられなかった。また、図形の使用数についても χ^2 検定を行っ

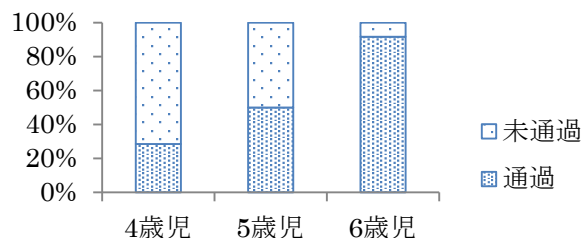


図3 各年齢における基礎能力テスト通過率

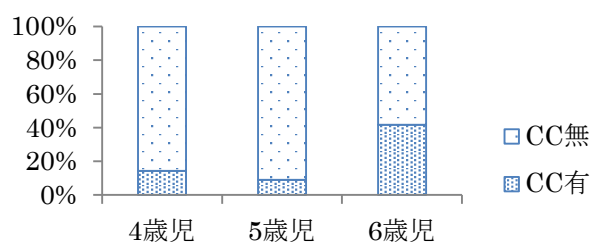


図4 各年齢のCC有無

たところ、個数間に有意な差がみられ($\chi^2(3)=42.833, p<.01$)、0個、1個、2個に比べて3個のほうが有意に多かった。

さらに、江尻(1993)の研究と同様に、見本群、言葉群についてはCC課題において見本や教示の模倣をした幼児がみられた。よって改めてCC課題で描かれた絵をレベル0~3に分類し、絵が完成していないものはレベル0、見本や教示の模倣のみを行っているものはレベル1、レベル2~3はCCの範囲によって分類した。見本群におけるCCのレベルと年齢について χ^2 検定を行ったところ年齢間に有意な差はみられず($\chi^2(6)=6.818, n.s.$)、また言葉群におけるCCのレベルと年齢についての χ^2 検定においても年齢間に有意な差はみられなかった($\chi^2(6)=4.757, n.s.$)。

考察

教示3群についての χ^2 検定の結果ではどれも有意な差はみられなかったが、年齢と基礎能力テストについての χ^2 検定では年齢間に有意な差がみられた。また年齢とCCの有無についても有意な差はみられなかったが、その傾向が見られた。この結果から、幼児では年齢が上がると描画についての基礎的な能力が備わり、同時にCCが現れやすくなるのではないかと考える。しかしこの結果について、幼児において年齢が上がると創造性も増えるとするのではなく、基礎的な描画能力が備わることによりCCという方略を用いることができるようになるのではないかと考える。さらにCCという手続きは基礎的な能力が備わっていないと現れないともいえ、幼児の創造性をはかる場合には取り組みにくい課題だとも考えられる。そして、今回教示については江尻(1993)と同様としたが、それらの違いから結果にどんな違いが出るかが江尻(1993)の研究においても記されていないため、今後更なる検討が必要だと考えられる。

文献

江尻桂子 1993 子どもの描く想像画:その発達と教示による効果 発達心理学研究第5巻第2号 154-164